

日本語による台日接触場面のフレーム分析

— 大学生のグループ討論をデータとして —

陳 明涓

学位取得年月：平成 18 年 3 月

取得学位名：人文科学博士

学位授与機関名：お茶の水女子大学

【キーワード】フレーム、接触場面、台湾人、トピックの転換、言語ホスト

【要旨】

文化を異にする者同士のコミュニケーションの問題を対象に、多くの研究が行われ、その原因の一つとしてフレーム (Frame) の存在が指摘されている (Gumperz 1982, Goffman 1986, Tannen 1993)。フレームとは、言語活動に対する期待が構造化されたものを指す。我々は所属している言語・文化集団によりフレームを形成し、無意識のうちにそれらを参照して言語行動を行っているという。同じ文化背景を持つ者同士の間では、フレームは暗黙の了解であるが、文化を異にする者同士の間ではその違いが顕在化する。しかも、語彙や文法などとは異なり、フレームによって引き起こされた問題の多くは当事者にとって「理由の分からない苛立ち・不完全感」として残ることが多い。本研究は日本語母語話者と、台湾人中国語母語話者の間での「討論フレーム」の異同を探り、グローバル化時代の日本語教育への示唆を導き出すことを目的とした。

実験方法は Watanabe(1993)を参考し、4 人のグループに三つの討論テーマを与え、15～20 分で討論するようにと教示した。データ数は「台湾人同士の母語場面」、「日本人同士の母語場面」、「日本人と台湾人留学生による接触場面」がそれぞれ 10 組で、合計 30 組である。

まず、本研究は二つの母語場面の分析を行った。結果、両者の討論フレームは「討論の開始部」、「テーマ間の移行」、「ポーズ」、「発言順番と進行役」、「トピックの転換」、「討論の終結部」の六つの側面で違いが確認された。その後、その違いをもとに台日接触場面を観察した。結果、全体的から見ると、使用言語である日本語フレームの影響が相対的に強く、日本語フレームは台湾人によっても積極的に行使されていたことが明らかになった。しかし、部分的な面では、それぞれの母語フレームの影響と、接触場面に合わせたフレームの調整が観察された。母語フレームの使用に関する受け入れの違いも確認できた。

一方、接触場面では母語フレーム以外の影響 (言語面の力関係) も存在しうることから、接触場面の役割調整という課題を立て、分析を行った。その結果、台日接触場面では必ず使用言語の母語話者 (日本人) が「言語ホスト」役をしていないことが明らかにした。そして、主導権の所在 (日本人か/台湾人か) により、フレームの発動と調整方法に違いがあることも分かった。つまり、接触場面のフレームは参加者の母語フレームと使用言語フレームと役割意識など、複数の要因によって調整、そして再構築されていると考えられる。

本研究は母語場面及び接触場面におけるグループ討論をフレームという観点で分析することで、台湾人と日本人が共同で討論を行う時、相互に持つ違和感の解明を試みた。結果、接触場面で両者が持つ違和感は、母語フレームの影響による結果と確認でき、接触場面のフレームは参加者の調整により再構築されていることも明らかにした。日本語教育に対する示唆として、まず、フレーム分析は中立的な立場で接触場面の問題を突き止めることができ、より適切な指導に結びつくことができることである。そして、教育にフレームという概念を取り入れ、接触場面の問題を未然に解消することができることも考えられる。今後はデータ数を増やすと同時に、中国語による接触場面の分析も行い、本研究で得られた結果が言語により影響されるかどうかを検証する。また、非母語話者の滞日年数など様々な要因を考慮に入れ、研究を積み重ねていきたい。

(ちん めいけん)